

## 間伐材の利用を進め、溪流生態系に配慮した工法



← 丸太残存型枠



← 木柵工



← 木製水路工



← 校倉式土留工

遅くなりましたが、先日は治山事業の紹介ツアーに、参加させて頂き本当にありがとうございました。今回のツアーで「治山と言う言葉」始めて知る事ができ、内容もよくわかり、山を見てみると「治山と言う言葉が」頭によくわかります。私達は、当り前の用に、山を見てたけど、今回のツアーで「シカによる被害対策とか、雑木をこつたり、間伐をしたら、山を守ってくれてる事」を知る事が出来ました。森林管理の方たちの、おかげで私達も、安心して生活をする事が出来ます。山や自然は作る事が出来ません。私達も、出来る事は、少しでも協力して行きたいと思っております。本当に今回は、ありがとうございました。

### 届けられた「お礼状」

「治山事業のツアー」を企画し、

「お礼状」を企画し、

宮崎北部森林管理署では、平成19年8月の台風5号により、宮崎県延岡市北方町の上鹿川地区等で甚大な被害が発生し、現在も宮崎県と連携を図り「特定

流域総合治山事業（注1）」の取り組みを行っています。当地区では、治山事業の効果

完成した溪間工や県の治山工事施設などの見学を行いました。参加の皆さんからは「森林管理署の方たちのおかげで安心して生活することができています。できることは協力していきたい」など、お礼の便りが届きました。今後とも、治山事業として、国民生活の安全・安心を確保するという役割を果たすために、民・国との連携を図りつつ、効果的・効果的な治山事業の実施に努めていくこととしています。

（文責 治山課 課長補佐 山部義臣）

局では地球温暖化防止、CO2削減などの対策についても積極的に取り組むこととしています。この取り組みの一環として、工事に丸太残存型枠・残存型枠（ピアス式）や木柵工・木製水路工などの間伐材を用いた施工を行うなど生態系保全に配慮した工法などに積極的に取り組んでいます。

平成23年も、新たな工種・工法等に間伐材の利用を進め、さらに溪流生態系に配慮した工法などの推進を図ることとしています。

### おわりに



スリットダムを視察する一行（宮崎北部署）

### 特定流域総合治山事業

特定流域総合治山事業は、民有林と国有林の治山事業実施箇所が近接している箇所において、事業効果の早期発現と効率的な事業実施を図るため、民有林・国有林を一体とした計画的な整備を実施する事業であり、平成22年度、九州局管内では、6地区において計画しています。

（注1）



# 口蹄疫防疫作業に職員も大奮闘 51日間の戦い

## 口蹄疫の発生

平成22年度が明けて間もない2010年4月20日、宮崎県都農町で牛が口蹄疫に感染した疑いがあるとの報道が一斉に報じられました。宮崎県内での口蹄

疫発生は今回が2回目であり、前回の2000年発生時は、迅速な対応により短期間のうちに感染拡大を押さえ込むことができたことから、数戸の農家でのみの発生だけで封じ込めることができ、その結果、殺処分・埋

## 非常事態の宣言

5月18日には知事が県内全域に非常事態を宣言したことから、県内全域においてイベントや学校等の行事の中止・延期、公共施設の閉館等により、畜産農家に限らず県民全体が大きな影響を受けることになりました。まさしく畜産王国宮崎県が危機に陥ることになりました。

## 埋却候補地の選定

このような状況の中、口蹄疫激震地の国有林を管理する当署に最初に求められたものは、殺処分される家畜の埋却地の提供でした。増加し続ける感染家畜を殺処分した後の埋却地不足を懸念した県から要請があり、さらに口蹄疫対策特別措置法においても、「国は殺処分した牛、豚の埋却に必要な土地を確保する。」とされたことから、局関係課と連携し、当署が管理する国有林内での埋却候補地の選定

されるなど被害地域は次から次へと拡大しながら11市町村にまで及び、口蹄疫感染家畜は増加の一途をたどり、止まるところを知りませんでした。



国有林内の防疫措置として林道入口に消石灰を散布

けられていました。当初、防疫作業は、国職員（主に地方出先機関を含む九州農政局関係職員）、県内外警察官、県内外県職員、市町村職員、JA等団体職員等で行われていましたが、口蹄疫終息の目処も見えず長期化することが予想されたことから、防疫作業の人的支援の強化が求められていました。

このため、九州農政局長から当局局長に防疫従事者の派遣依頼があり、埋却地の提供の次に当署に求められたものは、防疫作業の人的支援でした。

当署が日頃お世話になっていた農政局農業水利事業所職員、県・市町村職員の皆さんが毎日懸命になって、殺処分作業、埋却作業、防疫作業等に従事していることはよく知っていました

ながら、西都児湯森林管理署はこのまま何もなしなくていいのか



通行車両の防疫作業に必死に取り組む関係者ら

このことから、今回の口蹄疫の発生も誰もが短期間のうちに終息するであろうという思いもあつたかと思われませんが、発生翌日には隣町の川南町に飛び火するとも初となる豚への感染も確認

## 防疫（消毒）作業の支援

この間、車を媒体にして口蹄疫ウイルスが広域に運ばれることを防止するために、一般道では防疫（消毒）作業も懸命に続



噴霧器で車両底部の消毒に必死の関係者ら

という内心忸怩たる思いがありましたので、局長から防疫作業支援の話があったときには、即決で引き受けることにしました。ただ、自分だけの思いで引き受けたはいいが、今までやったことのない作業であり、職員の理解が得られるかだけが心配でしたが、この心配は取り越し苦労に終わりました。

## 署員一丸となって

職員全員に防疫作業支援の依頼があったことを話し、協力を求めたところ、思いは同じであっ

たのか全員が快く引き受けてくれました。

当署が割り当てられた消毒ポイントとは、24時間体制（6時～14時、14時～22時、22時～6時の3班交代制）で、当署は、6時～14時までの時間帯を担当することになりました。

1つの班は5名体制で、噴霧担当2名、ホース取り回し担当2名、動力機操作担当1名での実行体制でした。当消毒ポイントは通過車両が多いということ、噴霧作業を効率的に行うために、車1台につき左右両側から同時に消毒を行う

ため、このような人員配置になっていました。この5名のうち2名を当署職員が担当することになり、毎日2名ずつのローテーションを組んで5月24日から作業に着手しました。

署の所在地から消毒ポイントまで行くには、1時間程度の時間を要したので、5時過ぎには署を出発しなければならず、朝早いのがつらいというところもありましたが、そのことより

もつらかったことは、炎天下での作業でした。

## 心身ともに汗だくの取組

防疫作業に従事する者は、必ず上下つなぎの防護服に身を包み、さらにゴーグル、マスク、ゴム手袋、長靴は絶対に着用しなければならなかったため、外気に触れることができない身体部分にはほとんどなく、このようにな出で立ちで炎天下での作業が終われば、頭から水を被ったように汗で全身ずぶ濡れという状態でした。

また、消毒は車のタイヤと車両底部を中心に行いましたので、噴霧担当者は腰をかがめながらの作業を強いられ、特に通勤時間帯になると消毒ポイントから遙か後方まで車が数珠つなぎになることから、噴霧担当者は車の列が切れるまで延々と腰をかがめながらの作業を続けなければならず、腰の痛みとの戦いでもありました。こうした肉体的なつらさのほかにも、消毒のために停車してくれたドライバーをあまり待たせてはいけないという気遣いもしなくてはならず、精神的な気苦労もありました。防疫作業ピーク時には県内で400箇所近い消毒ポイントが

設けられていましたので、1日中車を走らせるドライバーにとっては日に何回も消毒を受けることとなります。このようなドライバーが消毒のために停止を命じられると、露骨にいやな顔を

する人もいたり、「さっき消毒を受けてきたばかりだ。」と怒鳴る人もいたり、急いでやれと言わんばかりに車の前面で作業をしているにもかかわらず、ジワリジワリと車を前進させる人もいたり、結構苦い経験をすることもありました。が、地元の人からは「がんばって下さい。」と温かい言葉をかけてもらったり、中には栄養ドリンクを差し入れてくれる人もいたり、つらい作業の中にも地元の人たちの優しい心遣いが身に染みましました。

当署が担当した時間帯の1日当たりの通過車両は、平均して450台位という決して少ないとは言えない状況の中で、炎天日と雨天日が繰り返された6月が過ぎ、猛暑が続く7月に突入してから、このまま防疫作業が続けば職員の熱中症等の健康面も心配されると危惧していたところ、口蹄疫感染の勢いもだんだんと衰えを見せ始め、被害家畜の埋却作業も順調に進んでいたことなどから、消毒ポイント

も一部解除することとなり、当署が担当した消毒ポイントも7月15日をもって解除となって、防疫作業を終了しました。

## 感謝の念で一杯

防疫作業従事日数51日間、従事職員延べ102人、全員健康を害することもなく無事故で作業を終了することができました。防疫作業期間中、早朝から昼過ぎまでほとんど休憩することもなく、太陽の日差しがジリジリと照りつける中で、また土砂降りの雨の中での慣れないきつい作業であったにもかかわらず、誰一人愚痴ひとつこぼさず黙々と作業に当たってくれた職員全員に感謝の念で一杯です。また、こうした作業を通じて、西都児湯森林管理署として地域に貢献できたことも大きな収穫であったと思っております。

最後に、口蹄疫という悲惨な事故により、殺処分・埋却を余儀なくされた29万頭の被害家畜の冥福を祈るとともに、被害に遭われた農家の皆さまの1日も早い復興と再建を祈念申し上げます。

（西都児湯森林管理署

署長 松葉瀬裕之



# 『低コスト造林』の確立に向けた取組 コンテナ苗を活用した低コスト造林技術の開発

## はじめに

人工林資源が成熟する中、間伐や再造林等への投資を促進し、森林の健全性の維持および森林吸収源対策の推進、地域経済の活性化を図ることが重要となっています。

しかしながら、木材収入の割に林業経営コストは掛かり増しとなり、林業生産活動は停滞し

ているのが現状で、林業経営に係るトータルコスト削減が大きな課題となっています。

このことから、コスト削減の取り組みの一環として、コンテナ苗を活用した「低コスト造林」に取り組むこととしました。

## コンテナ苗を使ったコスト削減への期待

コンテナ苗の特徴は一般的に、

- ① 時季を問わず植付が出来る
- ② 植付後の活着が良い
- ③ これまでの植栽方法に比べ、簡易な方法

- ④ で植栽できる
- ⑤ 苗木生産においてハウスの育苗が可能となり労働が軽減できる
- ⑥ 年間を通して出荷できることから余剰廃棄苗の回避ができるなどと言われています。

この特徴を生かせば、伐採搬出後すぐに植栽することにより木材生産と一貫した事業の実行が可能となり、苗木運搬の機械化や機械の利用で枝条整理を工夫することにより地拵の低減が図られます。また、植付後の活

別表

平成22年度コンテナ苗植栽計画

署名	植栽本数(本)	備考
福岡署	12,000	
熊本署	13,600	
熊本南部署	2,900	誘導伐
大分署	4,675	
宮崎署	21,225	誘導伐
都城支署	13,700	誘導伐
宮崎南部署	5,000	誘導伐
宮崎北部署	11,100	誘導伐
鹿児島署	16,000	誘導伐
大隅署	5,600	
計	105,800	

※ 誘導伐とは、人工林を対象に、常に森林として維持すべく、樹高の2倍を限度に伐採し、更新を図るもの。(対象林齢は46年～50年)



コンテナ苗：育苗舎での育苗状況



スギ・ヒノキのコンテナ苗

## データ収集と普及に向けた取組

着が良いことに加えて、成長の早い優良品種との組み合わせにより、下刈り回数減少が期待できるなど、育林経費の大幅な低減が期待できます。

前述のコンテナ苗の特徴については、一般的に言われていることであるが、検証例がないことから、九州森林管理局と森林総合研究所が連携して宮崎森林管理署の石坂国有林内にコンテナ苗の植栽試験地を設定しました。

試験地では、約1・2畝を12プロットに区分けし、10プロットに去年の8月から1年を通し

て植栽時期を変えながらコンテナ苗を植栽。2プロットには一般の苗を今年2月に植栽し、活着率や初期生長量等を調査し比較を行っています。

また、試験地以外にも約45畝に約11万本のコンテナ苗の植付(別表参照)を行い、個所毎に調査木を設定して活着率や初期生長量のデータを集積し、作業方法の検討も併せて行い、これらの取り組みによって得られたデータは民間林業関係者等へも公表していくこととしています。

## おわりに

コンテナ苗の植栽は始まったばかりで、今後の課題として①小型・軽量で丈夫な根鉢の苗を生産するための育苗技術の確立②年間を通じた苗木の安定供給③育苗コスト削減による苗木の低価格化④苗木の規格化などがあげられます。

九州森林管理局では、今後もコンテナ苗の植栽を進めながら、「低コスト造林」が図れることのデータを示すことで、その普及・拡大に努めていく考えです。

(文責 森林整備課

課長補佐 長瀨直)



# 新任挨拶

どうぞよろしく

## 沖縄森林管理署長



さとう たかゆき  
佐藤 隆 幸

年齢 53歳  
出身地 青森県

抱負 初めての九州局勤務です。新たな気持ちで業務に取り組み、沖縄署・地元の特徴をより発揮したいと思います。また、職員的安全確保と健康で明るい職場に取り組みたいと思います。沖縄の自然、文化を学びたい。

## 景観を考慮した間伐の取組

【宮崎北部森林管理署】宮崎県五ヶ瀬町役場において、宮崎県、五ヶ瀬町役場職員、霧立山の自然環境を守る会、公民館長や当署職員など10人が参加し「景観を考慮した間伐協議会」を行いました。会議では、流域管理調整官が間伐個所の林分状況や稚樹の発生状況などの経過観察の説明を行った後、意見交換を行いました。特に針広混



協議会で意見交換＝宮崎北部

交林に誘導するための植え込み樹種の選定やシカ対策などの意見が出され、当署では、委員の方々から出された意見などを参考に施業を行っていくことにし

ています。

## 森林整備協定を締結

【大分西部森林管理署】12月20日森林の持つ多面的機能の維持向上に向け、隣接する民有林と国有林が連携・協力して森林共同施業団地を設定し、関係者が共同で利用できる路網の整備や効率的な森林整備を推進することを目的として森林整備推進協定を締結しました。当日の記者発表では、地元テレビを含め、報道関係者6人が取材に訪れ、多くの質問、意見がだされ、森林林業の活性化に向けた取り組みをPRする大変良い機会とな

りました。



森林整備推進協定を締結＝大分西部

## 海岸保安林を清掃

【大隅森林管理署】鹿児島県大崎町にある海岸保安林、通称

「くにの松原」において、清掃作業を行いました。当日は大崎町、大隅素材生産事業協同組合、当署巡視員など36人が参加し、松林内に散乱する一般家庭ゴミやタイヤ、空き缶など軽トラック約5台分を回収しました。今回ゴミを回収することにより、「海岸林」の改善に貢献し、不法投棄防止をアピールをする良い機会となりました。



ゴミを回収する参加者＝大隅

## 局庁舎の耐震改修工事始まる

九州森林管理局庁舎は昭和41年5月に竣工。災害時には、対策指揮や情報伝達、救護、消火活動などの災害対策拠点としても活用される施設となっておりま

主な工事内容は、PC（プレキャストコンクリート・工場製作された強度の高いコンクリート）にて正面と両側面を囲う、鉄骨ブレース（鉄骨のすじかい）で補強する、梁・柱・壁の弱い部分はカーボン繊維で補強するなどの工事です。

また、執務室などの天井面の張り替え、サッシの改修なども行うこととしています。

（担当＝経理課）



耐震改修工事中の局庁舎

## 人のうごき

12月15日付林野庁長官発令  
沖縄森林管理署長

佐藤隆幸（林野庁）

◇長い間で苦勞  
さまでした◇

12月31日付森林管理局長発令

浦口典弘（経理課）



# 手作りの作品に満足 リース作りに28人が挑戦

12月12日、監物台樹木園みどりの交流館にて第5回実践・公開講座「クリスマスリースづくり」が行われ、熊本市内外から28人が参加しました。

リース作りのまえに、指導普及課で作成した「シカと森林のカード」を体験していただきました。みなさんシカと人間の駆け引きを楽しみながらも、現在日本の森林で起こっているシカ被害の現状を初めて知った、と驚いている人もおられました。本題のリース作りでは、サルトリイバラの蔓を巻いて作った



自作のクリスマスツリーに大満足の参加者ら

土台にスギの葉、松ぼっくり、クロガネモチの赤い実などで飾り付けをしていきました。参加者は思い思いの材料を使い、講師の先生にアドバイスをもらいながらリースを完成させていきました。にぎやかなリース、シンブルなリースなど、みなさん自分の作った作品に満足された様子で、「クリスマスが待ち遠し

い、家に帰って早く玄関に飾りたい」と、作品を手にとり嬉しそうな顔で帰路に着かれました。  
(担当II指導普及課)

## クリスマスツリー用「モミの木」を提供

【大分西部森林管理署】クリスマスツリーの飾り付けが行われる季節に併せて、今年も、3カ所の幼稚園に鉢植え一本と採取したモミの木を提供しました。フレール三芳幼稚園では、園児らが手作りの赤や緑の帽子をかぶり、ツリーの到着を大歓声で迎えてくれました。飾り付け



感謝状を贈呈する児童＝大分西部

が終わると、お礼に、クリスマスソングを歌い、「すてきなモミの木をありがとうございました」と感謝状を贈ってくれました。



部会の中の憩いの森  
監物台樹木園の  
多様な植物

シンチョウゲについて名前は知らなくても早春の香りは誰もが知っている中国原産の常緑低木です。たくさん枝がある自然に樹形が円くなることから剪定をする必要はなく、日本には室町時代から庭園に植えられ楽しまれていきます。雌木はほとんどなく果実はめったに見ることができませんが、たまに果実（球形の赤い液果）を付けることもあります。このため繁殖は挿し木で行い、移植に弱いことから、移植するよりも挿し木で

## ④0 ジンチョウゲ (ジンチョウゲ科)

新しく増やす方が確実にとも云われています。

名前は、シンチョウゲのいい香りとその強さを、沈香（じんこう、フトモモ科の熱帯植物）、丁字（ちようじ、ジンチョウゲ科の熱帯植物）の香木の香りに例えて付けられています。

冬の間につぼみを頭上にまつまって沢山作り、外面は紅紫色（白花もあり）の花を2月から3月に咲かせ、強い香りを発します。樹木園の中央付近の右側につぼみを沢山付け、来春の花と香りが楽しめるジンチョウゲ



が生き生きとしています。



みどり  
が  
歩  
路

明けましておめでとうございます。寅から癸を受けた卯年は寒い年明けとなった▼ウサギと言えば「月ではうさぎが餅つきをしている」とよく聞かされ、満月の夜空を眺めていた子ども頃を思い出す。小惑星探知機「はやぶさ」が7年の歳月と60億キロという長旅の末、無事帰還した現代の子どもにはどのようなように映っているのだろうか▼国際生物多様性年から癸を受けた今年には国連が定める「国際森林年」である。テーマは「人々のための森林」。ロゴマークには樹幹上部の中心に人物が描かれ、その周囲に木の葉や鳥、果実や家、雲や雨などがデザインされ少々複雑に感じるが、眺めていると人と森との関わり、時代の流れと技術の進歩などが脳裏に浮かび、森林の多面的機能が人類の生存に欠かせないものであること。人々のための森林であることへの思いが伝わってくる▼我が国のテーマは「森を歩く」とされた。当広報紙では「各署の名山」と題し、九州各地の山を紹介している。休日などを利用し、山を歩いてみては如何だろうか。新たな出逢いがあるかも？(晴)